

小象の「元気」で行こう!



生活習慣病防止へ!

市民と医療者の会

国際情勢や事件の背景など ニュースの本質を、誰にもわかりやすく話すことで定評のある、池上彰さんの著書「伝える力」は、100万部を超えるベストセラーになりました。ここには、特別な秘訣ではなく「まず自分自身が深く理解すること」「謙虚に対象に向かうこと」「良い聞き手になること」など、いい話し手になる基本が書かれています。

いかと常々思ってきました。個性も感情も病状も千差万別で、言葉の理解力も異なる多くの患者を相手に、短時間のうちに、高度に専門的な内容を、それぞれにふさわしく、分かりやすく話す。誤りは許されたい。医師の言葉によって励まされ、生きる希望を持つことも多いでしょう。これほどの「話のプロ」いや「言葉のプロ」がほかにいるでしょうか。しかし、医師のすべ

医療と言葉

るのだと思います。一方、患者の方はどうでしょう。私も、医師の受診を数多く経験してきました。そんな時に、実は「言葉」をめぐる後悔が多いのです。診察室を出た直後に襲ってくる「私の説明不足のために、正しく

者の指導、アドバイスが大変重要です。食生活や運動の重要性は、いろいろな場で指導を受けてきました。しかし、なかなか実行できないうちに、実は「言葉」をめぐる後悔が多いのです。診察室を出た直後に襲ってくる「私の説明不足のために、正しく

「ぞっ」としたアドバイス

診察してもらえなかったのではないかと強迫観念で悩んでいました。そんな私に、あるとき医師がこんなことを言いました。「小倉さん、世の中にはあんなに大事なことを聞き漏らしたて、いませんよね」

「はあ」と私。そんなことは考えたことがありませんでした。日本では、肥満した老人は、あまり見えないような気がしま

私は、そのやり取りをもとに「未来マシーン」に「写真」という物語を書きました。中学生の主人公が、大学の文化祭で「未来マシーン」という機械に出合う。髪の毛を一本取られ、体重を測られ、社から発刊されました。医学的知識を親しみやすく、分かりやすく子どもたちに伝える、小象の会の試みの一つと



学生の頃の記憶には断片的なものが多い。それは言語学の最初の講義の時だったと思いますが、教授は冒頭に「言語は通じないものなんだ」と言いました。凡庸な学生の私は、そこから先の講義内容を全く記憶していません。しかし、「言語は通じないものだから」という逆説的な発言は、今に至るまで私の自戒となりました。言語が通じないものであればこそ、作品の創作に当たって、少しでも読者に伝わるように、表現を工夫し、努力する。

患者と医療者との間でも、同様ではないでしょうか。

(小象の会 理事、児童文学作家・小倉明)

